

## 下保さんを悼む

古 畑 正 秋

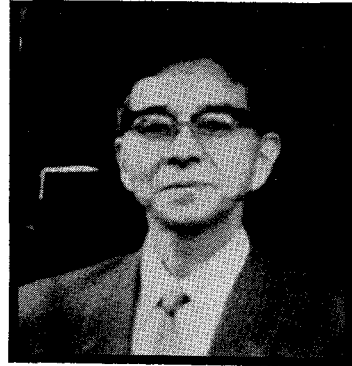
下保氏は1980年くらいから手足のしびれなどの軽い症状を訴えておられたが、まあお年のせいでもあらうから、その中に元気になられるだろうくらいに受けとっていたところ、だんだん悪化されて、昨年7月に入院され、その後手術を受けられて間もなく、10月17日に他界された。温厚な人柄で多くの人に親しまれていた下保さんだっただけに、まったく惜しい人をなくして残念である。

下保さんがいつごろから天文に興味をもたれたかは知らないが、家の事情で中学を中退された頃であらうと思われ、当時としては数少ない有能なアマチュア観測者として活動しておられた。指導に当たっていた神田茂先生に望まれて、1935年に26才のとき北海道から上京され、東京天文台の臨時傭いとなって、神田先生のお手伝いをするようになった。私が始めてお会いしたのもその頃である。それから定年退職する1969年まで三十数年に亘って天文台で主として観測に従事されている。アマチュア時代からの興味も手伝ってのことであらうが、非常に広い範囲の観測に精力的にとり組まれてきた。

まず上京された翌年には当時天文台にあったツァイス製の彗星掃索望遠鏡で変光星観測中に、7月17日に新彗星を発見されている。この新彗星、Kaho-Kozik-Lis(1936 III)は887年という長い周期彗星で、再び見参できるのは難しそうであるが、この発見によって11月14日には本会の新天体発見賞を、次いでアメリカの太平洋天文学会よりドノホール氏賞牌を受けている。幸先きのよい天文台生活であった。

1937年には天文台の本廬、41年には枝手に昇進されているが戦争中は鉛直線偏差の測定などにも従事されていた。戦後は変光星の写真観測に主力をそそいで、三鷹と岡山県金光で小型カメラ数台で多数の写真を得ている。そして多くの変光星の要素決定などを行い、それらの結果を東京天文台プレテン Nos. 30, 49, 110 に発表している。その間新しい変光星の発見も行われ、5個の新変光星を検出して、それらをプレテン No. 87 (1956) に発表している。この頃から光電測定による掩蔽の観測が天文台で盛んに行われるようになったので、多くの人と協力してその観測に従事している。1962年に堂平の91 cm 反射鏡が完成されてから、主としてその写真により、多数の超新星の光度観測を行っている。それらはプレテン Nos. 176, 189 に発表されている。

天文台に入られてから多くの国内での日食観測に参加されて、いろいろな種類の観測をされている。1941年の石垣島、1943年の厚岸の皆既日食ではコロナの直接写真



による測光、1948年礼文島、1958年の八丈島の金環食では接触時刻の観測などである。

下保さんは本会との関係も深く、昭和20年代から30年代にかけて多大の貢献をしている。昭和22-24, 30-32, 36-42年は理事として天文月報の編集に当り、28-30, 32-36の三期にわたり支部理事を務めている。また昭和40年代には大塚奨学金選考委員、会計監査なども務められている。そんな関係で本誌へも多彩な内容について、30編にも及ぶ寄稿を載せられている。天文台退職後もそれが続けられ、1969年4月号には「日本の空のまたたき」として、188 cm 反射鏡の設置場所を決めるために各地で行ったシンチレーションの観測資料などを基に、年間のシンチレーションの変化などを吟味した結果を出されている。1971年5, 6月号には「古代立石の天文学」として立石を天文学的に考察した興味ある調査結果を述べられている。

著書には「変光星の探求」(恒星社, 1957)と「変光星の観測」(恒星社, 1970)があり、変光星観測者へのよい指針となっている。本会編「天体観測入門」にも変光星観測の項を執筆しておられる。このほか、主として退職後に各種の天文雑誌に多数の有益な寄稿をされて、アマチュア天文家の指導に当られており、神田先生のあとを継いで天文の普及に尽くされたこと多大であった。

下保さんの天文学はほとんど独学で勉強されたものであり、これだけの業績を残されたことは特筆してよいことと思う。1963年には東京大学講師に昇進されている。英文の論文なども読み書き自由に達しておられたことも感心させられる。しかも派手な進出を嫌われて、こつこつと好きな道に生涯をかけた、まさに篤学の士と言いうことができる。

人柄にふさわしい静かなもの言いに、ほとんど50年の長きに亘って接してきた私には感慨深いものがある。ご冥福を祈ること切である。